

沖縄県宮古島市平良下里方言



【沖縄県宮古方言区画】宮古諸島は、宮古島、大神島、来間島、池間島、伊良部島、下地島、多良間島、水納島の8つの島からなる。宮古諸島の言語は、琉球方言区画上、八重山方言、与那国方言とともに南琉球に属し、宮古本島（来間島も含む）大神島、池間島、伊良部島、多良間島（水納島も含む）に下位分類される。また、中本（1976）内間（1984）では、宮古本島方言は、さらに本島北部方言（大浦・島尻・狩俣）と南部方言（大浦・島尻・狩俣以外の集落）に分かれる傾向があるとしている。

【宮古方言について】宮古方言は、南琉球の中でも独自性が強く、八重山方言のように沖縄方言の影響はあまりみられない。

宮古方言の母音は / i i e a o u / の6母音が認められる。/i/は、/i/、/ki/、/gi/、/si/、/zi/、/ci/、/pi/、/bi/のようにあらわれ、主に共通語のイ段に対応する。音声的には、摩擦音を伴って発音されることがあり、[p^si tu]（人）のように無声子音と結合するときは[s]を伴い、[b^ʔi:]（蘭草）[ma^ʔi]（米）のように有声子音と結合するとき、または単独であらわれるときには[z]を伴う。

子音の特徴としては、共通語の八行子音に対応するp音が盛んにみられること（ただし池間島、池間島から分村した伊良部島佐良浜、宮古島市西原を除

く）、[fugi]（首）[ffa]（子）[vva]（お前）のように唇歯音/f//v/が認められること、[mtsɪ]（道）[kav]（被る）のように単独で拍を形成する/v/、/m/がみられること等があげられる。

動詞も特徴的で、宮古方言では、いわゆる終止形に[saki]（咲く）と[sakim]（咲く）の2形がみられ、[saki]はいわゆる連用形、連体形に対応する位置にもあらわれる。これは、他の琉球方言と大きく異なるところである。また宮古方言では、共通語の五段活用にあたる動詞と一段活用にあたる動詞の区別が保たれており、北琉球方言に比べ、ラ行四段（五段）動詞との統合が進んでいない。これも宮古方言の特徴の一つであるといえる。

形容詞においても宮古方言は特徴的で、[takakai]（高い）のように「高く 連用形 + あり」からなるいわゆるカリ活用がみられる（宮古方言以外にも奄美方言の一部でみられる）。その他の琉球方言では、沖縄を中心に、奄美、八重山、宮古多良間島の形容詞は、「さ + あり」の融合した形が用いられている。例えば、沖縄首里方言では、「高い」は「タカサン」である。また宮古方言では、「高い」は疊語形式の「タカータカ」や「もの」が結合した「タカムヌ」のようないわゆる終止形相当の語がみられるのも特徴的である。

【表記について】いわゆる中舌母音は、小さい「ウ」を添えて次のようにあらわす。

/i/ = イウ、/ki/ = キウ、/gi/ = ギ、/si/ = シウ、
/zi/ = ジウ、/ci/ = チウ、/pi/ = ピウ、/bi/ = ビウ
唇歯音の/f/は、/fa/ = ファ、/fo/ = フォ、/fu/ =

フとする。単独で拍を形成する子音は、/m/ = ム、
/v/ = ヴ とする。

【調査概要】本稿の記述は、基本的に宮古島市平良下里で生まれ育った高年層話者への聞き取り調査資料をもとに行っている。

沖縄県宮古島市平良下里方言の活用表

《動詞：a類》

活用形		a1類 書く	a1類 読む	a1類 笑う	a1類 言う	a2類 居る	a3類 死ぬ
終止類	断定	カキウ	ユム	バロー	アイウ	ウイウ	シウン
	非過去	カキウム		バローム	アイウム	ウイウム	
	断定	カキウタイウ	ユムタイウ	バロータイウ	アイウタイウ	ウタイウ	シウンタイウ
	過去						
	命令	カキ	ユミ	バライ	アイウジ	ウリ	シウニ シウニル
	禁止	カキウナ	ユムナ	バローナ	アイウナ	ウイウナ	シウンナ
	意志	カカ カカディ	ユマ ユマディ	バラ バラディ	アイウザ アイウザディ	ウラ ウラディ	シウナ シウナディ
推量	カキウバジウ	ユムバジウ	バローバジウ	アイウバジウ	ウイウバジウ	シウンバジウ	
接続類	連体	カキウ	ユム	バロー	アイウ	ウイウ	シウン
	非過去						
	連体	カキウタイウ	ユムタイウ	バロータイウ	アイウタイウ	ウタイウ	シウンタイウ
	過去						
	中止	カキ カキッティ	ユミ ユミッティ	バライ バライッティ	アイウジ アイウジッティ	ウリ ウリッティ	シウニ シウニッティ
	仮定	カカバ カキウチュウカー	ユマバ ユムチュウカー	バラバ バローチュウカー	アイウザバ アイウチュウカー	ウラバ ウイウチュウカー	シウナバ シウンチュウカー
理由	カキバ	ユミバ	バライバ	アウジバ	ウリバ	シウニバ シウニリバ	
派生類	否定	カカン カカジャーン	ユマン ユマジャーン	バラーン バラージャーン	アイウザン アイウザジャーン	ウラン ウラジャーン	シウナン シウナジャーン
	丁寧	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)
	使役	カカシウ カカシウミウ	ユマシウ ユマシウミウ	バラシウ バラシウミウ	アイウザシウ アイウザシウミウ	ウラシウ ウラシウミウ	シウナシウ シウナシウミウ
	受身	カカイウ	ユマイウ	バライウ	アイウザイウ	ウライウ	シウナイウ
	可能	カカイウ カキウウーシウ	ユマイウ ユムウーシウ	バライウ	アイウザイウ △アイウウーシウ	ウライウ ウイウウーシウ	シウナイウ シウンウーシウ
	尊敬	カカマイウ カカサマイウ	ユママイウ ユマサマイウ	バラマイウ バラサマイウ	アイウザマイウ アイウザサマイウ	ウラマイウ ウラサマイウ	シウナマイウ シウナサマイウ
	継続	カキウイウ	ユミウイウ	バライウイウ	アイウジウイウ	(該当形 欠)	シウニウイウ
	希望	カキウブシウカイウ	ユムブシウカイウ	バローブシウカイウ	アイウブシウカイウ	ウブシウカイウ	シウンブシウカイウ
	のだ	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)

《動詞:b類・来る・する》

類別		b類 見る	来る	する
活用形				
終 止 類	断定	ミーイウ	キウシウ	ツシウ
	非過去	ミーム	キウシウム	ツシウム
	断定 過去	ミータイウ	キウシウタイウ	ツシウタイウ
	命令	ミール	クー	ツス
	禁止	ミーイウナ	キウシウナ	ツシウナ
	意志	ミー ミーディ	クー クーディ	スー スーディ
	推量	ミーイウパジウ	キウシウパジウ	ツシウパジウ
接 続 類	連体 非過去	ミーイウ	キウシウ	ツシウ
	連体 過去	ミータイウ	キウシウタイウ	ツシウタイウ
	中止	ミー ミーッティ	キウシ キウシッティ	シ シッティ
	仮定	ミーバ ミーイウチュウカー	クーバ キウシウチュウカー	スーバ ツシウチュウカー
	理由	ミーリバ	キウシバ	ツシバ
派 生 類	否定	ミーン ミージャーン	クーン クージャーン	スーン スージャーン
	丁寧	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)
	使役	ミーシウミイウ	クーシウミイウ	《シウミイウ》
	受身	ミーライイウ	クーライイウ	《シウミライイウ》
	可能	ミーライイウ △ミーイウウーシウ	クーライイウ △キウシウウーシウ	《ナイウ》
	尊敬	ミーマイウ ミーサマイウ	《ンミヤーイウ》	《アサマイウ》
	継続	ミーウイウ	キウシウイウ	シウイウ
	希望	ミーブシウカイウ	キウシウブシウカイウ	ツシウブシウカイウ
	のだ	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

		赤い	上手(だ)	生徒(だ)
終 止 類	断定非過去	アカカイク アカカ _△ アカーアカ	ジョージウ	シートウ
	断定過去	アカカタイク	ジョージウヤタイウ	シートウヤタイウ
	推量	アカカイクバジウ	ジョージウヤイクバジウ	シートウヤイクバジウ
接 続 類	連体非過去	アカカイク	ジョージウナ	《シートウヌ》
	連体過去	アカカタイク	ジョージウヤタイウ	シートウヤタイウ
	中止	アカカリ アカカリッティ	ジョージウヤリッティ ジョージウヤシーッティ	シートウヤリッティ
	仮定	アカカラバ アカカイクチュッカー	ジョージウヤラバ ジョージウヤイクチュッカー	シートウヤラバ シートウヤイクチュッカー
	理由	アカカリバ アカカイバ	ジョージウヤリバ ジョージウヤイクバ ジョージウヤーバ	シートウヤリバ シートウヤイクバ シートウヤーバ
派 生 類	否定	アカフニヤーン	ジョーツザアラン	シートウヤアラン
	なる	アカフナイウ アカーアカナイウ	ジョージウンナイウ	シートウンナイウ
	丁寧	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)
	のだ	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)

1. 動詞の活用の特徴

(1) 活用型と語類の対応

a 類(五段動詞)は 型、b 類動詞(一段動詞)は 型と 型 r、「来る」は 型 k{k}、 型 s {kis}、 型 r {kuRr}、「する」は 型 s{s}と{Qs}の活用型を持つ。

a1 類には、「読む」のように断定非過去形と連体非過去形の末尾が成拍の子音となる語がみられる。また「笑う」のように断定非過去形と連体非過去形の末尾が連母音の融合によって長音化している語もみられる。「笑う」は[baraφu] [barau] [baro:] の変化を経ている。さらに「思う」は「ウムー」のようになり、ウ段長音となる語もみられる。「言う」は、やや例外的な活用となる。意志形の「アイウザ」や中止形の「アイウジ」等のように /z a/ や /zi/ の拍がみられるが、これは[a²i]の摩擦噪音が発達したものであると考えられる。平良下里方言では /i/ は音声的に[i] ~ [i²]のように摩擦を伴う。a1 類と a2 類の活用は、同じようにみえるが、断定過去形、連体過去形においては、基幹尾略に「タイウ」(古典語の「たり」に対応)が後接した形、希望形においては基幹尾略に「ブシウカイク」(「欲しかり」に対応)

が後接した形となる点で異なる。

a3 類の「死ぬ」は、 型 n {sin} の活用形を持つが、命令形において「シニウ」と「シニル」、理由形において「シウニバ」と「シウニリバ」のように 型 r {sinir} も併用されている。これは、古典語におけるナ行変格活用の名残であると考えられる。

b 類動詞「見る」の意志形は「ミー」、否定形は「ミーン」であり、北琉球方言のように b 類動詞のラ行四段(五段)への統合は進んでいない。

「来る」の意志形、命令形の「クー」は、/ko/ に遡る。 型 s は、/i/ と /i/ と結合するときにあられる。

「する」は{s}と{Qs}の型があらわれるが、{Qs}は/sir/の音変化によるものである。例えば、命令形の「ツス」は/siro/から、理由形の「ツシバ」は/sureba/からの変化によるものである。

(2) 各活用形の特徴

〈断定非過去形・連体非過去形〉

断定非過去形は、2つの形があらわれる。例えば「書く」「見る」「来る」「する」は、それぞれ「カキウ」「ミーイウ」「キシウ」「ツシウ」、「カキウ

△「ミー△」「キシウ△」「ツシウ△」という形になる。「書く」を例にみると、「カキウ」は、共通語のいわゆる連用形「書き」に対応する形であり、「カキウ△」は「書きむ」に対応する形であると考えられる。しかし「△」については、服部(1978)による推量の助動詞「も」とみる説や平山他(1966)による「もの」とみる説もある。また、の成立について、平山他(1967)、名嘉真(1992)などのように宮古方言の「カキウ」にも「居り」が融合しているとみる説もある。これによれば独自発達の新しい姿となる。

「ミー△」は、「ミーイウ△」からの変化によるものであると考えられる。

連体非過去形は、断定非過去形 と同形で、「書く」「見る」「来る」「する」は、それぞれ「カキウ」「ミーイウ」「キシウ」「ツシウ」となる。

- ・ジューユ カキウ (字を書く)
- ・バガ カキウ△ドー (私が書くぞ)
- ・カキウ ピトゥ (書く人)

〈断定過去形・連体過去形〉

断定過去形、連体過去形は同形で、a 類においては基幹イウ段に「タイウ」(古典語「たり」に対応)を後接した形である。例えば、「書く」の断定過去形、連体過去形「カキタイウ」は、「書きたり」からの変化によって成立したものである。

ただし、a2W類の「居る」においては、基幹尾略にタイウが後接した「ウタイウ」という形になる。他に「ある」の断定過去形も同様に「アタイウ」となる。

- ・ウキウナンカイ イキウタイウ (沖縄に行った)

〈命令形〉

a 類動詞「書く」の命令形「カキ」は、/kake/からの変化によって成立した形である。a3 類の「死ぬ」の命令形は「シウニ」の他に 型 r の「シウニル」も併用されている。これは、ナ行変格活用の名残である。b 類動詞「見る」の命令形は「ミール」であり 型 r の形式をとる。/miro/からの変化であると考えられる。「来る」の命令形は「クー」であり、/ko/に遡る形である。「する」命令形「ツス」は/siro/に遡る。

- ・ピャーピャーティ カキ (早く書け)
- ・クリュー ミール (これを見る)

- ・アツア クー (明日来い)

〈禁止形〉

基幹イウ段 (= 断定非過去形) に「ナ」が後接し、禁止の意味をあらわす。

- ・ジューユ カクナ (字を書くな)
- ・ユ△ナ (読むな)
- ・ツシウナ (するな)

〈意志形〉

「カカ」「ミー」「クー」「スー」のように単独で用いられる形と、「カカディ」「ミーディ」「クーディ」「スーディ」のように「ディ」伴った形の2形が併用されている。

- ・ジューユ カカ (字を書こう)
- ・バガ カカディ (私が書こう)

〈推量形〉

断定非過去形 に「パジウ」が後接し推量の意味をあらわす。語形は、共通語の「はず」に対応するものであるが、意味的には異なり「たぶん~だろう」という意味で用いられる。「パジウ」は過去形にも付く。

- ・アツアマイ ゾー ワーチュキウ ナイウパジウ (明日も良い天気になるだろう)
- ・カリヤー イキウパジウ (彼は行くだろう)
- ・カリヤー イキウタイウパジウ (彼は行っただろう)

〈中止形〉

基幹イ段単独の形、または基幹イ段に「ツティ」が後接した形が用いられる。「ツティ」は「して」が変化したものと考えられる。

- ・アツアガミ カキ クー (明日まで書いて来い)
- ・カキツティカラ アスパディ (書いてから遊ぼう)

「書いて」の否定の形は「カカダナシー」が用いられる。

中止節を作る形ではないが、基幹イ段に「は」に相当する助詞「ヤ」が融合した形も用いられ、「マイ」を伴い、逆接仮定「~ても」をあらわす。

- ・イキヤーマイ シウマイウイウ (行っても終わっている)
- 「イキヤー」は「イキ+ヤ」の変化。

〈仮定形〉

a 類動詞においては基幹ア段、b 類動詞において

は基幹イ段、「来る」「する」においては基幹ウ段長音形に「バ」が後接した形が用いられる。また基幹イウ段に「チウカー」が後接した形も用いられる。「チウカー」は「てから」が変化した形であると考えられる。

- ・バガ カカバ ユマディナ(私が書いたら読むか)
- ・アツァー アミヌ フイウチウカー フニャー
ー イディムバジウヤー(あした雨が降れば、船は出ないだろう)

否定の形は、a 類動詞においては基幹ア段、b 類動詞においては基幹イ段、「来る」「する」においては基幹ウ段長音形に「ダカー」が後接した形が用いられる。「ダカー」は、「ディ+アラン(「あらぬ」に対応)+カラ」の変化であると考えられる。

- ・アツァー アミヌ フラダカー フニャー
- ・イディドゥ ッシウバジウヤー(あした雨が降らなければ、船は出るだろう)。

〈理由形〉

基幹イ段に「バ」が後接した形が用いられる。

- ・マイニチュ アミヌ ツフイバ キウンヌ
カーラカン(毎日雨が降るから、衣が乾かない)。

〈否定形〉

基幹ア段に「ン」「ジャーン」が後接した形が用いられる。「ン」は「ぬ」から、「ジャーン」は「ディ」に「あらむ」が後接した形からの変化である。両者はどちらも否定をあらわすが、前者は、状態の打ち消しを、後者は意志の否定をあらわすとされる。

- ・カリヤー ンナダ カカン(彼はまだ書かない)。
- ・ノーバシーヌクトウヌ アラバマイ パーヤ
カカジャーン(どんなことがあっても、私は書かない)。

〈丁寧形〉

宮古方言では、丁寧形に該当する形はみられない。これも1つの宮古方言の特徴である。

〈使役形〉

a 類動詞においては、基幹ア段に「シウ」「す」に対応)、「シウミイウ」「しめる」に対応)の両方が後接し、使役をあらわす。b 類、「来る」においては、それぞれ「ミーシウミイウ」「クーシウミイウ」

のように「シウミイウ」のみが後接する。「する」の使役は、「シウミイウ」が用いられる。「シウミイウ」は、古典語の「しむ」と同源であると考えられる。

- ・ウトウトウンカイ カカシウ(弟に書かせる)。
- ・ウトウトウンカイ カカシウドウ ッスツタ
ラ(弟に書かせたら)。「カカシウドウ ッス」は、「書かせぞする」に相当し、強調の表現となる。
- ・カヌピウトウンカイ カカシウミイウ(あの人に書かせる)。
- ・ウトウトウンカイ シキンヌ ウキシウミイ
ウ(弟に受けさせる) N直後の助詞ユ(「を」に対応)は、ヌとなる。

〈受身形〉

a 類動詞は、基幹ア段に「イイウ」「れる」に対応)が後接する。b 類、「来る」は、それぞれ「ミーライイウ」「クーライイウ」のように「ライイウ」「られる」に対応)が後接する。「する」の受身は「シミライイウ」が用いられる。

- ・シンシーン ナーユ カカイイウ(先生に名前を書かれる)。
- ・シンシーン シウカモー シウミライイウ(先生に仕事をさせられる)。

〈可能形〉

基幹イウ段に「ウーシウ」がついて可能をあらわす。

また受身形で示した「イイウ」「ライイウ」も可能の意味をあらわす。平良下里方言では両形とも能力可能、条件可能の区別なく用いることができる。

- ・ウトウトー ジューユ カキウーシウ(弟は字を書くことができる)。
- ・ウトウトー ジューユ カカイドウ ッシウ
(弟は字を書くことができる)。
- ・アミ ヤラバマイ イカイドウ ッシウ(雨でも行ける)。
- ・アミ ヤラバマイ イキウーサイサイ(雨でも行けるよ)。

〈尊敬形〉

a 類動詞は、基幹ア段に「マイウ」「サマイウ」が後接し、b 類動詞は基幹イ段に「マイウ」「サマイウ」が後接して尊敬をあらわす。「来る」は、「ンミヤーイウ」「する」は、「アサマイウ」が用いられる。

- ・シューガドゥ カカマイウ (お爺さんが書かれる)
- ・シューガドゥ ウキサマイウ (お爺さんが受けられる)
- ・シューガドゥ ンミヤーイウ (いらっしゃる)
- ・シューガドゥ アサマイウ (お爺さんがされる)

〈継続形〉

継続形は、「カキウイウ」「ミーウイウ」「キシウイウ」のように基幹イ段に「ウイウ」「(居り)」に対応)が後接してあらわされる。

- ・ンナマドゥ カキウイウ (今書いている)
- ・ンナマドゥ シーウイウ (今している)

「結果」をあらわす用法として狩俣(1992)や名嘉真(1991)では、「カキアイウ」(「書きあり」に対応)の形があらわれるが、平良下里方言では用いられず、「結果」は、以下のようにあらわされる。「カカイウイウ」は「書かれ-居り」、「シーウキウ」は「し-置く」に対応する形である。

- ・ウマンドゥ カカイ ウイウ (ここに書いている)
- ・カイガドゥ シーウキウ (彼がしてある)

〈希望形〉

a類においては、基幹イウ段に「ブシウカイウ」(欲しかり)が後接し希望をあらわす。

- ・バガドゥ カキウブシウカイウ (私が書きたい)

a2類の「居る」においては、基幹尾略に「ブシウカイウ」が後接した「ウブシウカイウ」という形になる。

〈のだ形〉

対応語形なし。

準体助詞「の」に相当する形としては「ス」がある。

- ・カキウスヌドゥ マシウ (書くのが良い)

2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

【形容詞】

〈断定非過去形・連体非過去形〉

平良方言は、いわゆるカリ活用であり、断定非過去形は、「赤い」を例に示すと「アカカイウ」と「アカカ_△」の2形があらわれる。は「赤くありむ」

は「赤くありむ」に対応すると考えられる。その他に「アカーアカ」など置語形「語幹長音形+語幹」があり、よく用いられる。連体非過去形は、断定非過去形と同形で「アカカイウ」である。

- ・ウヌ ナイウザ アカカイウ (この実は赤い)
- ・ウヌ ナイウザ アカカ_△ (この実は赤い)
- ・ウヌ ナイウザ アカーアカ (この実は赤い)
- ・アカカイウ ナイウ (赤い実)

〈断定過去形・連体過去形〉

断定過去形と連体過去形は同形であり、「赤い」は、「アカ(語幹)カ(尾略)タイウ(古典語「たり」に対応)」となる。これは、「赤くありたり」に対応すると考えられる。

- ・ウヌ ナイウザ アカカタイウ (この実は赤かった)

〈推量形〉

動詞と同じように、断定形に「パジウ」が後接し推量の意味をあらわす。非過去形ではのほかの置語形にも付く。

- ・ウヌ ナイウザ アカカイウパジウ (この実は赤いだろう)
- ・ウヌ ナイウザ アカーアカパジウ (この実は赤いだろう)

〈中止形〉

「語幹-イ段(カリ)」単独の形、「語幹-イ段」に「ッティ」が後接した形が用いられる。「ッティ」は「して」の変化と考えられる。

- ・カラツザ アカカリッティ ミーヤ オーオー (髪が赤くて目が青い)

中止節を作る形ではないが、「アカカリ」に「は」に相当する助詞「ヤ」が融合した「アカカリヤ」 という形も用いられ、「マイ」が付いて、逆接仮定「〜ても」をあらわす。

- ・イシウカ アカカリヤマイ ジョーブン(いくら赤くても良い)
- ・クヌ ビウトー カーギヤ バイウカリヤマイ キウモー カギカ_△ (この人は、容姿が悪くても心は美しい)

〈仮定形〉

「語幹-ア」段に「バ」が後接した形と「語幹-イウ段」に「チウカー」が後接した形が用いられる。

「チッカー」は「てから」に対応すると考えられる。

- ・アカカラバドゥ マシウ(赤ければ良い)
- ・アカカイウチッカー マシウ(赤ければ良い)

否定は、「語幹-ア段」に「ダカー」が後接した形が用いられる。

- ・アカカラダカー カーディ(赤くなければ買おう)

〈理由形〉

「語幹-イ段(カリ・カイ)」に「バ」が後接した形が用いられる。

- ・アカカリバ カージャー(赤いので買わない)

〈否定形〉

「語幹-フ」に「ニヤーン」が後接し否定をあらわす。

- ・ウヌ ナイウザ アカフニヤーン(この実は赤くない)

〈なる形〉

「語幹-フ」に「ナイウ」(「なり」に対応)が後接した形、「語幹長音形-語幹」に「ナイウ」が後接した形が用いられる。

- ・キーヌドゥ タカフナイウ(木が高くなる)
- ・キーヌドゥ タカータカナイウ(木が高くなる)

〈丁寧形〉

動詞と同じように、宮古方言では丁寧形に該当する形はみられない。

〈のだ形〉

対応語形なし。

準体助詞「の」に相当する形としては「ス」がある。

- ・アカカイウスドゥ マシウ(赤いのが良い)

【形容名詞述語・名詞述語】

〈断定非過去形・連体非過去形〉

平良下里方言では、形容名詞述語・名詞述語ともに断定非過去形は、「だ」に相当する語尾は付かない。従って「ジョージウ(上手)+ヤイウ」、「シートウ(生徒)+ヤイウ」の形は用いられない。「シートウ(生徒)+サーイ」のように「よ」に相当する終助詞を伴った形があらわれる。

連体非過去形において、形容名詞述語では、「ナ

の形が用いられる。

- ・ジョージウナ ピウトウ(上手な人)

名詞述語の連体非過去形において、「生徒である人」に相当する形はない。ただし名詞の連体用法においては助詞「ガ」(が)「ヌ」(の)が用いられ、承ける体言によって区別される。「生徒」は「ヌ」で承けるが、代名詞、人をあらわす名詞は「ガ」で受け、それ以外の名詞は「ノ」で承ける傾向がある。

- ・バガ ムヌ(私のもの)
- ・キーヌ ユダ(木の枝)

〈断定過去形・連体過去形〉

平良下里方言では、形容名詞述語・名詞述語ともに断定過去形・連体過去形ともに「ヤタイウ」の形が用いられる。「ヤタイウ」の「ヤ」は「ヤイウ」の尾略である。

- ・ブドゥイウヌドゥ ジョージウ ヤタイウ(踊りが上手だった)
- ・ブドゥイウヌドゥ ジョージウ ヤタイウ ピトウ(踊りが上手だった人)
- ・クヌ ピウトー シンシー ヤタイウ(この人は先生だった)
- ・シンシー ヤタイウ ピトウ(先生だった人)

〈推量形〉

動詞型イウ段「ヤイウ」に「パジウ」が後接し推量の意味をあらわす。

- ・クヌ ピウトー シンシー ヤイウパジウ(この人は先生だろう)

〈中止形〉

形容名詞述語の中止形は、「ジョージウ+ヤリッティ」が用いられる。「ッティ」は「して」が変化した形と考えられる。また「ジョージウ+ヤ(尾略)+シーッティ」の形も用いられる。

- ・ウヌ ピウトー アークマイ ジョージウ ヤシーッティ ブドゥイウマイ ジョージウ ヤヤー(あの人は歌も上手で踊りも上手ね)

名詞述語の中止形、例えば「生徒で」は、「シートウ+ヤリッティ」の形があらわれる。

〈假定形〉

形容名詞述語、名詞述語ともに「ヤラバ」「ヤイウ-チッカー」が付いた形となる。

- ・ジョージウ ヤイウチッカー マシウ(上手

なら良いのに)。

・ジョージウ ヤラバ マシウ(上手なら良いのに)。

・シンシー ヤイウチウカー マシウ(先生なら良いのに)。

・シンシー ヤラバドゥ ナイウ(先生ならできるよ)。

否定の「先生でないなら」は「シンシー ヤアラダカー」となる。

〈理由形〉

形容名詞述語、名詞述語ともに「ヤイバ」が付いた形となる。「ヤイバ」は、「ヤリバ」「ヤーバ」となることもある。

・ブドゥイウヌ ジョージウ ヤイバ ピトゥン ドゥ シウカイウ(踊りが上手なので人に好かれる)。

・ヤラビ ヤイバ シウサツタン(子供なのでわからなかった)。

〈否定形〉

形容名詞述語、名詞述語においては、「名+ヤ(尾略)+アラン(「あらぬ」に対応)」の形が用いられる。「ジョーツザアラン」は、「ジョージウ ヤアラン」の音変化によるものである。

・キャリア ブドゥイウツザ ジョーツザアラン(彼は踊りが上手ではない)。

〈なる形〉

形容名詞述語、名詞述語ともに「ンナイウ」(「になり」に対応)が後接した形が用いられる。

・ブドゥイウヌドゥ ジョージウン ナイウ(踊りが上手になる)。

・キャリア シンシーン ナイウ(彼は先生になる)。

〈丁寧形〉

動詞、形容詞と同じように、宮古方言では丁寧形に該当する形はみられない。

〈のだ形〉

対応語形なし。

準体助詞「の」に相当する形としては「ス」がある。

・シンシー ヤイウスドゥ マシウ(先生なのが良い)。

参考文献

内間直仁(1984)『琉球方言文法の研究』笠間書院
狩俣繁久(1992)「宮古方言」『言語学大辞典 第4巻 世界言語編(下-2)』三省堂

下地一秋(1979)『宮古群島語辞典』自費出版
名嘉真三成(1992)『琉球方言の古層』第一書房
中本正智(1990)『日本列島言語史の研究』大修館書店

服部四郎(1978)「日本祖語について」『月刊言語』7-3 大修館書店

平山輝男他(1966)『琉球方言の総合的研究』明治書院

平山輝男他(1967)『琉球先島方言の総合的研究』明治書院

平山輝男他(1983)『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』おうふう

(中本謙)